

「どうしてその木の葉は早く散ってしまうのか」

私がコロナ禍の中で見つけた楽しみは、季節の移り変わりをはっきり感じることだ。限られた外出機会の中で、新しいことを見つけるのにはワクワクする。近所の住民にも慕われている桜並木、急いで校舎に走った雷響く夕立、友達と歩いた銀杏香る通学路、帰り道を彩るイルミネーションが陽東キャンパスを舞台に移り変わっていく。

きっかけは対面授業が部分的に再開された大学2年生の後期だった。秋も深まり、少し肌寒い朝、私は友達と陽東キャンパスの校門付近を歩いていた。2号館付近は、ちょうど銀杏が見頃の時期で「綺麗だね」「本当に懐かしい」とおしゃべりにも花が咲いた。2週間後の同じ曜日の朝に、同じように友達と11号館を目指して歩いていた。「なんか、あの木だけ周りよりも散ってない？」笑いながら友達は銀杏の木を指さした。確かに紅葉真っ盛りの木に混じって、その木だけは茶色の枝が見えていた。その木は銀杏並木の比較的真ん中にあるのに、どうして散るスピードが速いのかとびっくりした。その日は、対面でのおしゃべりも放課後のLINE上での会話も、銀杏の謎に対して面白おかしく仮説を立てることで持ち切りになった。さらに2週間後、真ん中の銀杏の木を残して端の木から枝が目立ち始めていた。どうやらこの前立てた日光の当たり具合で散るスピードが変わる説は外れてしまったらしい。真ん中の木は外側の木と比べて障害物がないため、よく太陽の光が当たっていた。私と友達はその点から、てっきり太陽が関係していると考えていたのだが…。気が付くと、週に一回の対面授業で、友達に会えることと同じくらい銀杏の様子を見ることが私たちの楽しみになっていた。

コロナ禍になって外に出る機会が減ってしまったが、そのことによって季節の些細な変化にも敏感になったと思う。毎日大学に通っていた時は、授業やサークル、アルバイトなどに追われていてじっくり風景を見る機会がなかったと感じる。特に大学1年生だった時の私は、初めての電車通学をすることになったので、学生生活のペースを掴むまでは余裕がなかった。入学式を終えて気がつくと葉桜になっており、単位の数え方や各校舎の教室の場所を覚えたとき安心している内に、イルミネーションの季節になっていた。3年生も終わりに差し掛かった現在を振り返ると、桜の季節は見ることができなかったが、キャンパスの青々とした木々が少しずつ赤や黄色に色づいていく様子や花も葉も落として冬支度を始める様子はしっかり楽しむことができた。

テレビで「現代の人は昔の人と比べて季節を感じにくくなっている」と聞いたことがある。昔の人は、気温の変化や旬の食材などではっきりと四季の移り変わりを味わっていたらしい。一方で、現在はエアコンや暖房の進化により人々の活動に適した温度で一年中過ごすことができる。食材も技術の進歩により、一年中美味しい状態で買うことができるようになった。便利な生活によって自然と人間の距離ができてしまったという番組だったと思う。今回のコロナ禍はその便利な生活にどんな影響を与えたのだろうか？人との接触を避けるために、テレワークやオンライン授業など室内で過ごさざるを得なくなっている。増えたおうち時間を快適に過ごすための商品が次々と生み出されて、買われている。つまり、自然と人間の距離はますます遠ざかってしまうということだろうか。私は、むしろ「外出したい」という人々の思いが自然と人間が向き合うことのきっかけになり得ると考えている。当たり前だった風景のちょっとした変化から、自然の美しさに気が付くことからスタートになるだろう。

「背筋から元気が見える」

「のびのびと背伸びの運動から～」この言葉を聞き、私の体に今日を生きるスイッチが入る。朝の光を浴びて、弾むピアノの音がラジオから流れてくるとともに体の隅々に新鮮な空気が巡って行く。上半身にたまっていた重たい空気がスッと下りていく。そして、「今日も元気に1日をお過ごしください。」と新しい1日に向けて送り出される。そう、私がコロナ禍で見つけた楽しみは、ラジオ体操である。

コロナ前の私は、電車で2時間かけて大学に通っていた。1限がある日は、6時過ぎには家を出るので、毎回慌ただしい朝を過ごしていた。しかし、コロナ禍により、私の朝は一変した。従来の対面授業からオンライン授業へと変わっていった。突然、私の朝にゆとりができた。そして、専業主婦である母とともに仕事や学校へと出かける父や妹、弟を送り出すようになった。そんな日々を過ごしていたある日、小学生の頃の夏休みの朝を思い出した。毎日通うと夏休みの最終日には子供会からの景品がもらえるので、嫌々ではあったが、早起きをして公民館でラジオ体操をしていた。体操を終えるとカードにスタンプを押してもらえるだけでなく、爽快感も感じながら帰宅をしていた。そうだ。また、あの爽快感を感じる朝に出会いたい。オンライン授業になり、特に朝だからとやることもなくなり、余裕に満ちていた私は、そんなことを思うようになった。翌朝、久しぶりにラジオを流してみた。最後に体操をしたのは10年以上前であっただろうか。忘れてしまったのだろうかと思っていたが、思いの外、体はまだ覚えていた。そして、体操を終えた後に感じることができるあの体の芯まで目覚め、爽快感を感じる朝に出会うことができた。

だが、今の私には、この爽快感は小学生の頃感じた以上のものを得ることができた。この感覚を味わうと同時に、毎朝家から出ることがなく、画面オフの授業も多いため、化粧をするなど身支度を整える必要もなくなり、授業を受けるという切り替えが上手くできなくなっていたことに気が付いた。切り替えを見失っていた私には、この感覚がただの爽快感だけではなく、新たな切り替えスイッチになったのだ。その日から、毎朝起きてラジオ体操をすることが小さな楽しみとなっていった。

毎日続けることで、家にいるだけの生活においても元気に過ごせるだけでなく、家族の中でも小さな変化が起きた。体操をする私を見ていた母が、「そうじゃない。もっと足を曲げて。」「手をもっと伸ばす。」などと、声をかけてくれるようになった。「じゃあ、やってみせてよ。」と私が言うと、得意そうに一緒に体操をして見せてくれた。今では、母も一緒にラジオ体操をするようになった。すると、小さく丸くなっていた母の背中が、日に日に背筋がピンと伸びたように感じてきた。そして、台所に立つ姿は、子どもの頃に見ていた背中のように、温かさと元気を垣間見ることができた。私の家で、母は家族のパワースポットである。母の背中から元気が見えることで、家族全体にも笑顔が増えて、家で過ごす日常に幸せをもたらした。

最初は、コロナによって作り出された朝のゆとりから始めたラジオ体操。これは、私に爽快感を与えてくれるだけでなく、私自身を切り替えるスイッチと朝の楽しみをももたらしてくれた。さらに、母の背中から元気も見えるようになり、家族全体にも笑顔が増え、楽しみの先にある日常の幸せを運んでくれた。卒業後も自宅から仕事に通い、出勤時間はわずか10分である。コロナ禍で見つけたラジオ体操は、コロナ後も私の楽しみとして在り続けるだろう。

「コロナ禍で広がる私の趣味」

コロナが猛威を振るい始めておよそ2年が経った。それまで当たり前だった生活が当たり前でなくなり、ニューノーマルと呼ばれる新常識が求められ、創られていった。このニューノーマルは私たちの私生活にも浸透し、外でなく家の中で過ごすことを余儀なくされた。しかし、そんな状況であっても人間は常に活路を見出し、適応しようとする生き物である。私もそんな人間の1人であり、家の中でも楽しく、快適に過ごすことができるよう、これまで興味が無かったようなことに挑戦したりして、むしろコロナ禍以前よりも趣味が増え、生活の彩度が上がったような気もする。

まず最初の楽しみは、バイクである。コロナ禍以前からバイクが好きでコロナがで始めたのと同時期くらいにバイクを購入した。コロナ禍で他県への移動さえ躊躇う日々が続いたが、バイクは基本1人で乗るものであり、走ることそのものを楽しむということもできる。旅行者が少ないコロナ禍では、道路も空いており、時折立ち寄る道の駅なども人が少なく、感染のリスクを低くしたまま色んなところに行く事ができた。特に栃木県は日光や那須塩原など景勝地が多く、県外に出ずとも、走るだけで綺麗な景色を楽しむことができた。バイクはバイク乗り同士でつるむのも楽しみの一つではあると思うが、1人でも十分に楽しめる趣味であると思う。

二つ目の趣味は美術である。家で過ごすとなった時にハマった漫画がきっかけで美術に興味を持つようになった。漫画のタイトルは『ブルーピリオド』というもので、主人公が東京芸術大学に挑戦していくという物語である。この漫画を読むまでは美術は、私なんかには理解できない高尚なものという先入観があったが、それが取り払われ、もっと自由に感じて良いんだと思えるようになった。また、自分でもスケッチブックを買い、デッサンにも挑戦した。新しいことに挑戦するというのは怖かったり、続けなければ意味が無いと思ったりしたが、それ以上にやっぱり楽しいことなんだと再確認することができた。美術館にも行くようになった。デパートなどに展示されている子供の絵でさえ、しっかりと見るようになった。この美術にハマるといことがコロナ禍で新しくできた楽しいことの最大の部分かもしれない。

最後の楽しみは町探検である。県外への旅行ができないということで、移動できる宇都宮市内で今まで行ったことのない店、場所を開拓していこうと思ったのが始まりである。散歩がてら外に出て、通ったことのない道とフラフラ歩いて行き、道中で見つけたコーヒー屋やお菓子屋に後日向かう。このおかげでお気に入りのカフェを一軒、バーを一軒見つけることができた。新しい道を見つけて歩くというのはそれだけで、毎回新鮮な体験ができ、新しい気になるお店を見つけるとワクワクする。そしていざお店に行ってみて期待どうりだったと喜んだり、ちょっと違うかもなと思ったり、同じようなサイクルの毎日が少しずつ変化していくのを楽しむことができた。目的のある行動も良いが、あえて目的をつくらず気の向くままに過ごすのもこのコロナ禍で発見できた楽しいことの1つである。

以上の3つがコロナ禍で私が発見でき、広がることのできた趣味である。今後も今の状況に落胆ばかりしていないで、新しい発見や体験を見つけ、経験し日々の生活に変化をつけることができれば良いなと思っている。コロナ禍が早く終息し、行動の制限が無くなり、さらに趣味が広がり、楽しいと思える時間が増えることを祈っている。

「コロナが私にもたらしたもの」

私にとって「コロナ渦の楽しみ」とは何だったのか。当時は、コロナという前代未聞の非常事態によって冬休み前に突然高校が休校になり、いつのまにか受験生になってしまった自分に不安を感じていた。また、受験が終わっても人に会えない孤独が続き、想像以上に辛い思いをした。だがそんな私でも、コロナ渦ならではの楽しみを感じることはあった。

私にとっての「コロナ渦の楽しみ」は大きく分けて二つだ。一つは、祖母と一緒に毎日犬の散歩に行くことである。夕方五時を知らせる公民館のチャイムに合わせてウチの犬が鳴き、それを聞いて祖母と私が散歩の準備を始めるのがいつもの散歩のルーティンであった。そのため、散歩に行くのは決まって五時であり、この夕方五時からの三十分間が私の中でいつものまにか特別な時間となっていた。散歩道はいつも決まって田んぼを大きく一回り。祖母の話の切り口はいつも、「今日は東京都（の感染者数）何人？」であった。世間はコロナ渦、私は受験生。新しい話の種はそう見つからない。だから良かったのだと今になっては思う。その日のコロナの状況について二人で一通り話した後に、決まって昔の思い出を語り合うのが習慣になっていた。祖母と一緒に直売所に行って野菜を出しに行っていたこと。家から畑に向かう道の途中では必ず自動販売機に立ち寄ってジュースを買ったこと。私の保育園のイチゴ狩りに、母に代わって祖母と一緒に行ってくれたこと。どれも他愛のない話ではあったが、話せば話すほどお互いの思い出が鮮明になっていくこの時間がいつのまにか私に楽しみをもたらしていたのである。二つ目はサイクリングである。前々から気になっていた父のオフロード自転車を物置小屋から引っ張り出して様々な場所へ行った。といっても、地域散策のようなものであって、行き先も特に決まっておらず、コースも時間も私の気分で決めていた。最初はほんの暇つぶし程度だった。しかし、自分の気の向くままに好きな道を進んでいくことは想像以上に楽しかった。いつも見かけるこの道は一体どこにつながっているのだろう。道の途中には何があるのだろう。すぐに知っている道に出るときもあれば、当然、なかなかなじみのある場所に行き着かないこともあった。何度か行き止まりだったこともあったし、民家に入りかけたこともあった。ただその分、今まで全く知らなかった自分だけのお気に入りの場所というものを見つけることができた。なかでも特に好きなのが、一本の道の両脇に白樺の木がざーっと立ち並んでいるあの空間である。周りは杉や檜ばかりであるのに、なぜかそこだけ白樺しかない。幹が白いからなのか、地面からひよろひよろと生えているからなのか、その白樺の道を通る度に神秘的な感覚に陥るのである。たまたま雨が降り始めたときに通りかかったことがあったが、そのときはいつも以上に不思議な感じがし、それかそれで別の魅力を感じることもできた。たまたま始めたサイクリングも気づけば、自分だけの新たな発見という楽しみにつながっていたのである。

これら二つの経験はおそらく、コロナ渦であったからこそ味わうことのできたものだったと思う。私にとって「コロナ渦の楽しみ」とは何だったのか。それは、何気ない日常から素敵な価値を見出せたこと、そして、今まで見落としていた身近な魅力に気づけたことであった。コロナが多くを奪ったことは事実だが、私と与えられた楽しみは、実はそれ以上に価値のあるものだったのかもしれない。